

年は台風の影響で急遽、順延したので参加者が減ったが、それでも七十名近い参加があつた。

「江戸時代の大坂七墓巡りの参加者がどのよ

うな人たちであつたのか?」は不明だが、筆者

が主催している大阪七墓巡り復活プロジェクト

では、どのような人が参加しているのかは当然だが、よくわかっている。興味深いのは、ま

ず参加者が大阪のみならず、遠くは九州や東北、

大阪七墓巡り復活プロジェクト・七墓ツアーフェイスブックより  
<https://www.facebook.com/osaka7haka/>



大阪七墓巡り復活プロジェクト・七墓ツアーフェイスブックより  
<https://www.facebook.com/osaka7haka/>

と筆者は考へてゐる。大阪七墓巡り復活プロジェクトはそのための試みであり、社会実験ともいえるだろう。

さて、今年の二〇二〇年の盆も大阪七墓巡り復活プロジェクトを行なつたが、しかしコロナの影響があり、感染症防止のために筆者が一人で深夜に誰もいない七墓を巡り、「大阪七墓巡り復活プロジェクト」のフェイスブックページで、ライブ配信するという全く新しい形での七

墓巡りとなつた。

筆者は宗教者ではないが、それぞれの墓地（跡）で拙い『般若心経』を唱え、その様子をオンラインで参加者（視聴者）が見て、一緒に合掌をしてもらつた。江戸時代に流行つた「代参」の現代版のようなものといえるだろう。全部で十四動画あるが、それらの再生回数は計三千回を超えて、いまだに増え続けている。これは誰でも視聴可能なので、もじご興味がある方は、「大阪七墓巡り復活プロジェクト」のフェイスブックページの「動画」を参照してほしい。

オンラインで大阪七墓巡りをやることで、とくに新しい知見が広まつたということもないが、たつた一人で七墓を巡るのは、個人的には充実の時間となつた。普段の七墓巡りでは、百名近い人々を先導するので、どうしても参加者への気配りなどに意識を奪われる。死者と真摯に向き合おうとするならば、やはり一人でお参りするのが集中できるし、精神的な心構えができる。

また、七墓巡りで重要なのは、「墓」（点、ポイント）ではなくて、その「巡り」（ライン、線）にある。墓と墓のあいだを、一人で歩いていく

うちに、さまざまことを振り返る時間となる。筆者は毎年、七墓巡りをやつてゐるので、「去年の七墓巡りから一年たつて、自分はどうだったか?」と自分の来し方を考えたりする。また、今年はコロナ禍中ということもあり、「来年の七墓巡りは一体、どうなるだろうか?」「自分は生きて、七墓を巡つているだろうか?」と自分の将来や行く末などもじっくりと考える時間も多かつたようだ。

普段の日常の暮らしの中では、慌ただしい仕事や雑事に追われてしまふので、そんなことを振り返る時間はあまりない。しかし、自分の生き方、死に方を考えるには、墓を巡るに限るのではないだろうか。

この寄稿は『月刊石材』の読者が読むものだから、最後に、石材関係者のみなさまにお伝えしておくと、墓を作るという仕事は、死者のためだけではなくて、生者のためもあるのだ。筆者は、墓を巡ることで、死者と向き合うことで、自分の死生観を点検する時間を持つことができている。それは非常に貴重な機会で、ありがたいことだと年々、感じてゐる。

海外からの参加者など非常にバラエティに富んでいる。また二十代～四十年代が多いことも特徴で、さらにいうと独身で子供がない「おひとりさま」の参加者が非常に多い。

これは当初、まったく想定していなかつた現象であつたが、そういうおひとりさまの参加者は今後もますます増えるだろうと予想している。というのも、一九九〇年の国勢調査では五十歳男性の五・六%、五十歳女性の四・三%が一度も結婚歴がなかつたが、それが二〇一五年の国勢調査では男性二三・四%、女性一四・一%と急増している。俗にいう「生涯未婚率」だが、これは今後も増加すると予想されている。

さらに、現代日本社会は、いよいよ高齢化社会から多死社会に移行しつつある。厚生労働省の『平成二十九年（二〇一七）人口動態統計の年間推計』によると、二〇一七年の死亡者数は約百三十四万四千人だが、これが二〇三〇年頃には年間死者数は百五十万人を超えて、それが約三十年間ほど続くという推計データもある（国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口（二〇一七年）』）。

まさに大阪七墓巡りをすることで、「無縁と無縁者の誰かが自分のことを思つて巡つてくれるかもしれない。過去と現在と未来の無縁者たちが七墓巡りによつて時を超えて繋がつていくすれば自分が死んで無縁仏になつても、未來の無縁者の誰かが自分のことを思つて巡つてくれるかもしれない。過去と現在と未来の無縁者たちは、無縁仏のために供養の巡礼をする。そうすれば自分が死んで無縁仏になつても、未來の無縁者の誰かが自分のことを思つて巡つてくれるかもしれない。過去と現在と未来の無縁者たちは、無縁仏によつて時を超えて繋がつていく気がする」と語られたことであつた。

現代社会は、血縁、地縁、社縁などが崩壊して「無縁化社会」と呼ばれるが、こうした社会状況の中であるからこそ、「無縁を大前提に、繋がりあえる仕組みが必要なのではないだろうか。

この中には、もちろん生涯未婚の死者も多く、無縁仏になつてしまふ人も多いだろう。そういう社会状況も大阪七墓巡り復活プロジェクトの不思議な人気を後押ししている。実際に、ある四十代後半の独身女性の七墓巡りの参加者から「無縁者の自分が、いま生きているうちに、過去の無縁仏のために供養の巡礼をする。そうすれば自分が死んで無縁仏になつても、未來の無縁者の誰かが自分のことを思つて巡つてくれるかもしれない。過去と現在と未来の無縁者たちは、無縁仏によつて時を超えて繋がつていく気がする」と語られたことであつた。

まさに大阪七墓巡りをすることで、「無縁と無縁者の誰かが自分のことを思つて巡つてくれるかもしれない。過去と現在と未来の無縁者たちは、無縁仏ために供養の巡礼をする。そうすれば自分が死んで無縁仏になつても、未來の無縁者の誰かが自分のことを思つて巡つてくれるかもしれない。過去と現在と未来の無縁者たちは、無縁仏によつて時を超えて繋がつていく気がする」と語られたことであつた。